

(JAPAN NOW観光情報協会)

—平成15年12月12日開催—

「旅のリスクマネジメント」講演抄録

## 旅のリスクマネジメント

協会理事 近藤 節夫  
(元旅行会社役員)

### 1. はじめに

このたび一連の危機管理に関する、各界一流の講師陣の中に加えていただき、お話をさせていただくことを大変光栄に存じます。私自身はつい半年前まで旅行業界に籍を置いておりました。大変僭越ですが、わたしはこれまで40年近い旅行者としての経験の中で、また自分自身の若いころの「海外ひとり旅」の熾烈な体験から、旅行中のリスクマネジメントをある程度実感として捉えているつもりでおります。やや穿った見方だとお感じになる方がおられるかも存じませんが、多少奇想天外な自らの実体験もお話させていただきながら、ここでは特に「海外旅行におけるリスクマネジメント」について私の考えをお話致したいと思います。

### 2. 言葉の定義

まず、言葉の定義について一応整理しておきたいと思います。「リスクマネジメント」と「危機管理」という二つの言葉ですが、一般には相互に日本語と英語を置き換えただけの「同意語」と理解されがちですが、専門家の間ではこの二つの言葉はそれぞれ別の意味で捉えられているようでございます。三菱総合研究所政策工学研究部が出版した「リスクマネジメントガイド」(日本規格協会発行)なる書物の中で、その違いとして「事故や危機がなるべく起きないように対処する活動」、つまり予防的対処方を「リスクマネジメント」と呼び、「事故や危機的な状況が発生した後の活動」を「危機管理」と呼ぶと明確に定義づけています。ここでは、旅行中事故に巻き込まれないための心構えを重視したいと思いますので、主に前者の「リスクマネジメント」を中心に、若干「危機管理」についてもお話したいと思います。

### 3. 旅行者と旅行会社の立場

一般に個人の資格と責任で旅行する個人旅行者と、旅行者から手数料をいただいて旅行を手配する旅行会社では、おのずから事故発生に際して「状況把握」「認識度合い」「対応方法」「責任」等の面で立場や、考え方が異なることは当然のことです。前者は、もらい事故のような特殊な例を除き、通常事故発生はほぼ全面的に自己責任と考えられます。頭のハエは自分で追うということになります。第一義的には、自分で行動を起こし、第三者（在外公館等）から情報を得て、自分で支援者の助力を得て、自分の意思と決断により、事態を解決することになります。例えば、盗難、強盗、病気、交通事故、災害等は自分自身で解決しなければなりません。従って自分ひとりで絶対解決するのだという、強い気持ちがないと窮地における事態回復、打開は難しいと言わなければなりません。厳しい言い方になりますが、こういう前向きな気持ちがない方は、ひとり旅はもちろん、個人の旅行はよほど気をつけないと害を他に及ぼしかねないということも出来ます。

一方、後者の旅行会社は、団体旅行であれ、個人の手配旅行であれ、旅行手配者としての責任上お世話した旅行者が事故に遭遇するのを未然に防ぐためにも、まず、旅行前に説明責任を充分果たすことが求められます。そのうえで仮に旅行中に旅客が彼らの不注意から不用意な事故に巻き込まれても、旅客が顧客である以上黙って放置することは出来ないのが旅行会社の辛い、現実的な立場です。旅客の了解を得たうえで、旅客を励ましながらかともに協力しあい、事態の解決に努めなければなりません。

#### 4. 土地の「臨場感」とは？

では、なぜ海外旅行では危機や事故に遭遇する比率が高いのでしょうか？ 国内旅行に比べて、実際に発生の比率が高いか低いかは一概には言えませんが、海外旅行の事故は周囲のサポートを容易に得られないという点で、概してことがやや大げさに伝えられ、重大で致命的になりがちであることは事実です。

そのいくつかの原因を探ってみましょう。海外への旅行者が、

- ① 非日常的な旅をするうえで、旅のルール、掟、常識、エチケット等は無頓着過ぎる。
- ② その土地特有の「危機的な状況」や、漂っている異様な「危険な空気」に気がつかない。
- ③ 現在の国情、特に文化、宗教観、風俗、習慣等の違いがよく分かっていない。
- ④ 自分が案外無防備、無神経、不注意であることを自覚していない。
- ⑤ 災害等に巻き込まれるケースがある（こればかりは不運で責められない）。

これら最低限のルールを知らない、持っている情報が現場の実態と乖離している、土地勘がない、等のマイナス条件のうえに、決定的なことは被害者に、

- ① その場の「臨場感」が分かっていない、ということです。

ですから、

② 「臨場感」が察知出来ない、

ことから異常事態を招きかねないのだとつくづく思います。ここで言う「臨場感」とは、「その土地だけに漂っている独特の空気」であり、匂いであり、危険な雰囲気でもあるのです。

ではその「臨場感」とは、一般の人にとって一体どんなものなのでしょうか。

『臨場感』を知るとは、その土地に漂う雰囲気を知り、あたかもその土地にいるような気持ちになり、その土地の人々と同じ気持ちになることだと私は考えています。それは細かく言えば、その土地になじみ、住民の顔つきや、話し声、笑い声等のように、住民の呼吸とか、息づかい、その土地特有の匂いになじむことだと思います。さらに、地形になじみ、充滿する「匂い・臭い」や人ごみの喧騒とか、石造りの佇まいにも溶け込むことが出来ることです。土地っ子だけが知る事の出来る、一種異様なその場の空気です。かといって、その土地の住民が一番臨場感を意識して、なおかつ臨場感を知っているということではありません。一番分かっている、それでいて意識もしていない状態が土地の人々の、外の人が見て感じる臨場感といったらよいでしょう。土地の人々は言うてみれば、臨場感の中に溶け込んでいるような状態です。例えば、その土地に住む人々の生活感や活動的な特徴がもっとも端的に表れる、集会場である市場や、バスターミナル、鉄道駅には「臨場感」を五感で最も敏感に感じ取れる空気がみなぎっています。

かつてある戦友会のビルマ（現ミャンマー）慰霊巡拝団にお供したときの話です。航空機から降りてラングーン（現ヤンゴン）・ミンガラドン空港の空港ビル内へ入った途端、戦友会の人たちの気持ちは、たちまちタイムスリップして戦時中に戻ってしまったのです。「あ～懐かしいなあ。この匂いだ。ビルマの匂いだ」と一人の団員が不意に声高に叫んだのです。たちどころに団員全員の気持ちが戦時中に逆戻りしてしまいました。確かに曰く言いがたい一種独特の匂いが、その室内には漂っていました。それは、日本にいてはとても嗅ぎ取る事の出来ない、独特の匂いだったのです。戦後30年を経てビルマを訪れた旧日本軍兵士は、そこに懐かしい戦前のビルマの匂いを感じたのです。これもひとつの臨場的要素であると思います。

## 5. どうしたら「臨場感」を身につけられるか？

まず申し上げておきたいことは、「臨場感」は現場にしかなく、現場で感覚的にしか身につかない」ということです。いくら事前に話を聞いて分かっているつもりの人でも、現場を踏んでない人には金輪際分からないということです。人の話を聞いたり、知識として知ってはいても「臨場感」の実態とか、本質は決して現場以外では分かりません。ですから、現場へ出来るだけ足を運ぶということが、「臨場感」を知るためには大切なことです。それには、好奇心を駆り立て、異文化、未知のものへの探究心とか、興味、関心がなくてはなりません。初めての土地へ来たとき、その土地の人々が集まるような場所へ出かけ、そこ

にただじっとしているだけで、徐々に「臨場感」感覚は身についてくるものなのです。1～2時間、街の中をぶらつくだけでいいのです。歩いていけば、充満する住民の生の声や、その土地特有のけたたましい音、騒音が耳の中へ入ってきます。漂っている独特の「におい」も自然に鼻についてきます。団体旅行などでは、参加者一人だけの散歩を危険防止、事故防止のために極力止めさせようとするわけです。つまり団体旅行などでは、「臨場感」を身につけさせる機会から参加者を、特に好奇心の強い参加者を遠ざけようとするわけです。これは、冒頭にお話しましたように旅行会社の責任から、大切な顧客がトラブルに巻き込まれないよう注意をしようとする慮からです。ある面でやむをえない点でもあるのです。見方を変えれば、団体旅行に参加するお行儀のよいお客様は、いつまでもこの「臨場感」を身につける機会、つまりその土地に住む人々の気持ちが分からないまま、静かに観光旅行を「表面的に」楽しむということになります。

## 6. 臨場感を初めて知った時の驚き

ここで私自身のひとつの体験をお話しましょう。

それは、1967年が明けたばかりのお正月でした。スカルノ政権下のインドネシアの首都ジャカルタを初めて訪れた時のことです。スカルノ大統領も長期政権を辛うじて維持していた時代です。それまで私が知っていたスカルノというカリスマ大統領は、インドネシアを宗主国オランダの植民地から解放させ、独立国家として自立させ、東西の超大国である米ソに対抗しようとしていたのです。スカルノは新興アジア・アフリカ諸国のリーダーとして、第三世界を構築しようという大それた使命感を抱いた偉大な大統領であり、インドネシア独立の父であると私は理解していました。それまでに私が得た知識と情報は当然のことながら、ほとんど書物や、マスコミから間接的に得たものでした。さらに、スカルノ大統領の強硬な外交政策から推して、自給自足が可能なインドネシアは社会主義国家として、ある程度の社会水準、平均的な国民生活レベルに達しているものといふ早飲み込みしてスカルノの能力、国民的人気を過大評価していました。旅行直前にNHKが現地からTV生中継した、スカルノに擦り寄る茶番番組にもかどわかされてしまいました。所詮私自身のスカルノに関する情報とその分析が甘かったのです。それは国家経済、社会状態、現実に漂う空気（現場の実態）等とはまったくかけ離れたものだったのです。単にマスメディアから仕入れたままの情報を自分なりに検証することもなく、断片的な知識として蓄積されただけの、受け売りの疑似知識に過ぎなかったのです。自己反省するなら、スカルノの人間分析とインドネシアの現状認識があまりにも甘かったということになります。その当時、現地の実態とその周辺の臨場感に乏しかった私は、安定していると思いついたインドネシアの国情や治安にすっかり安心しきっていました。まさに、その心の陥穽を突かれたと言えいいのでしょうか。

ジャカルタ到着の翌日、私の後をつけてきた現地の若者に白昼堂々、住民監視の真っ只

中であつという間に背後から襲われ、背に馬乗りになられ、呆然としている私を尻目に腕時計までもぎ取られ逃げられてしまいました。言うならば、私はスキだらけだったので。間の抜けた大失態でした。しばらくしてよく目を凝らしてみると市内には、私を襲ったような若者がほかにもたくさんたむろして、鶺鴒の目鷹の目で隙だらけの外国人旅行者を狙っているということによろやく気がつきました。しかし、ジャカルタの幻影に眼くらましをくわされていた当初は、そういう辺りの不穏な空気、生の現実に思いが及ばなかったのです。この周囲の空気を知ることこそが、「臨場感に気がつく」「臨場感を知る」ということだと思います。

末期的なスカルノ体制とジャカルタの治安の悪さを知ったのはそのときでした。それまでインドネシアにとってのマイナスイメージは、日本のマスメディアがまったく伝えてくれませんでした。しかし、私は滞在中に現地でそのありのままの貧しい実態を、自らの屈辱的な事故と引き換えに身に浸みて感じました。ようやくインドネシアの実情を知ることが出来たのです。マスコミ報道の好い加減さを知ったのもこのときでした。このときを境に、私は初めての土地を訪れたときには、少しずつ現場の空気と自分の身に注意を払うようになりました。例えば、外国では背後から襲われないように、出来る限り壁際を歩くとか、何メートルかを歩いては後を振り返るとか、ひとりで逃げるときには賊を振り切って逃げられるようにスポーツシューズを履くとか、歩き方にも気をつけるようになりました。このように自分でも自衛策を考えるようになりました。生々しいと言えませんが、安穏な生活に馴れていると驚かれるように、実際は旅行先では、いつもそのくらいの警戒心が必要だとつくづく思います。

結局いつも現場にいて、その周辺の人々と同じような感覚を持っていないとダメだという事に遅まきながら気がついたので。

## 7. 研ぎ澄まされた臨場感は身につけられるか。

私はこれまでに添乗員としてお客様に同行して、お客様が大切な旅券を奪われた（紛失した）ことが3度あります。誠に恥ずかしいことで、お客様の不注意から起きた事故であるにしても、傍に付き添っている旅行のプロである添乗員としては、責任を感じざるを得ません。私はお客様の旅券紛失のような事故は、自戒の意味でも添乗員にも責任の一端があると思っています。もちろん基本的には紛失したお客様の過失であり、責任であると思っています。ただ、事故を防ぐために添乗員が、徹底的にお客様に完璧な防備体勢をとることで納得させる責任があるのではないかと考えています。杓子定規に口頭で注意を促すだけではダメなのです。添乗員としては、終始お客様に現地の臨場感をお話して、現地に行ってから少しでも危機的状況に陥る事態から避けさせようとする努力が常に求められるわけです。

また、こういうことも頭の片隅に入れておいた方がよいと思います。大勢の人が参加す

る団体であっても、仮にその中のひとりが旅券を紛失した場合、その団体の全体の雰囲気はぐんと落ち込んで、団体内は沈んだ、異様な空気になります。まるで沈黙のエアポケットに陥ったような状態です。お客様同士がお互いに妙に気を遣い、会話自体がぎこちないと感じることがあります。この一旦落ち込んだ暗い雰囲気を元の明るかった雰囲気へ戻すというのは、添乗員にとって並大抵な苦勞でなく大変な負担です。だからこそ、添乗員は最初から最後までお客様に徹底して旅券の保管の大切さについて、たび重ねてお話しするわけです。

そのうえで敢えてお話しすることですが、現実には添乗員にも臨場感を身につけた人とそうでない人、無頓着な人がいることも現実です。添乗員の性格的なことは別にして、これは添乗員という職責にどれだけ責任感と使命感を抱いているかという、添乗員としての資質の問題になります。また、現場の経験を積み重ねているかいないか、そしてそれを謙虚に自分自身にフィードバックしているかいないか、の差だと思います。

いずれにせよ「現場の空気を知る」ということが基本です。これが臨場感を身につけるということです。その点で、普段から本物志向、生のままに触れ知ろうと気にかけることをお勧めします。少なくとも海外へ出かける機会の多い添乗員には、日頃からお客様があまり体験出来ない外国の都市の環境や雰囲気について、自ら積極的に学び、自分なりに感じたことを出来るだけ効率的にお客様へアドバイスして、旅を楽しんでもらう姿勢が求められると思います。

## 8. 本物を知ることの意味

今年3月上旬私はシベリア鉄道でロシア大陸を横断しました。3月といえば、まだシベリアは豪雪の中にあり、一面雪原と白樺林のロシア大陸は果てしなく続き、将に広大でロシア文学の舞台そのものでもあります。トルストイの「復活」でネフリュードフがヒロインであるカチェリーナ・マースロヴァ（カチューシャ）の許しを請うために、ひたすら雪の中を追いかけるといったシーンが続きますが、そのストーリーがシベリア鉄道に沿って彷彿として浮かんで参ります。そこにはまさしく「本物のシベリア」があります。ところが、私の幾人かの友人は、「どうしてそんな寒いときに行くんだ」とか、「もっと気候の良い旅行シーズンに行けばいいのに・・・」とか、本物を見よう、本物に触れようとする私の考えとは反対のことを言いました。でも気候の爽やかな旅行シーズンの最中にシベリアを訪れたって、真にシベリアを理解することは出来ません。ロシア大陸の広大さは、冬の間人々が家の中に引き籠もって戸外に出てこない厳しい気象であり、暗い風景だからこそ、秘かに想像力を掻き立てることが出来るのです。シベリア的点描である、暗黒、重苦しい空、雪、煙突の煙、つらら、防寒具に身を包んだ人々、街灯、丸太小屋、小さな窓、刺すような寒さ、等々は真冬でなければ味わえないものです。例えば、2002年末に漸く全線電化されたシベリア鉄道が車内暖房だけは、まだ昔ながらに石炭に頼っているのは、一旦停電で

もしよものなら一夜のうちに、乗客全員がたちまち凍死してしまうからだどぶったまげのような話を聞いて、夜汽車に宿泊しながらつくづくシベリアの冬の怖さというものを実感として感じたものです。このような通常では想像も出来ないような現実にもこそ、極寒の冬にその真髓が分かる、シベリア大陸を訪れる意味があると考えています。

もうひとつ本物の例を申し上げます。今年2月旅行業界の居並ぶ経営者を前に、講演をする機会がありました。そのとき、大陸性気候について言及しました。小さな小島に住んでいる私たち日本人は、冷たい大陸の冷熱を伝える、厳しい大陸性気候というものに割合無関心なものです。札幌と北京が、仮に同じ零下10度の外気温であるとする、その寒さの感じはまったく違います。それは、湿度の高く、濡れた空気の日本の気象と、乾燥した空気の大陸性気候の北京では、肌を感じる感覚がまったく異なるということに気がついて欲しいと思います。表示される外気温は空気の乾燥度合いを表す湿度とはほとんど無関係といっても過言ではありません。この場合湿度が大きく影響しています。ここに日本人が思い違いする原因があります。そのとき偶々出席された張西龍・中国国家観光局主席代表も私に同意してくれました。それは、よく大陸性気候を言われるヨーロッパ大陸にしてもそうだし、北米大陸でもそうで、日本の湿った気候とはまったく別のものです。大陸性気候の特徴は、冬の寒さは肌を刺すように痛いわけです。だから、これらの国の人々は冬の間は、出来るだけ肌をじかに空気に晒さないようにします。特に、出っ張っている鼻、耳、顎、手先などに冷たい空気が直撃しがちですから、その予防に努めます。そのために、彼らは耳まですっぽりかぶれる帽子、手袋で身体を寒さから守ります。

ですから日本を離れたことがない人には、大陸性気候の身を切るような寒さとか、体感温度というのは気温だけではない、ということが容易には分かりにくいのです。冬季に大陸へお客様を案内する添乗員は、この辺りの説明をよほど臨場感に基づいて行う必要があるわけです。

## 9. どんなタイプの人が、いつ、どこで事故に遭いやすいか。

日本で普通の生活を送っている人でも、何となく事故に巻き込まれるタイプの人がいますね。どちらかといえば、ややそそっかしい人、不注意な人です。海外で事故に遭う人には、次のような人が多いような気がします。

- ① 不注意な人
- ② 性格的に大雑把な人
- ③ 何事にもノーテンキな人
- ④ すきだらけの人
- ⑤ 目立ちやすい人
- ⑥ 服装が派手な人
- ⑦ 服装がだらしない人

#### ⑧ 身体が小さく、体力的に弱そうな人

何となく分かるような気がしませんでしょうか。ありきたりですが、常に落ち着いて行動するということが大切です。また、服装にかなりその人の性格が反映されるものです。やはり隙のない身支度をすることが、不必要な被害からわが身を守るポイントのひとつでもあります。

次に、いつ？ どんな場所で？ 被害に襲われるケースがあるかということを考えてみますと、

- ① くつろぎの場所（レストラン、ホテルロビー・・・）
- ② 人気（ひとけ）のない場所（暗い場所、裏通り、夜遅い時間のエレベーター内、アメリカの郊外スーパーのトイレ、地下鉄駅構内）
- ③ 歓楽街の路地裏
- ④ 公園（薄暗くなった頃、人の目の死角になっている場所、夜のセントラルパーク）
- ⑤ 人ごみ（市場、鉄道駅、バスターミナル、バザール、みやげ物店）
- ⑥ 買い物中（携帯品に警戒心が無くなったとき）
- ⑦ 愛想のよい外国人に話しかけられたとき（チームプレイのもう一人をマーク）
- ⑧ 外国人（現地の人）に左右前後を囲まれ、身体を寄せられたとき

大体上記のようなケースに、うっかりしていてやられることとなります。③歓楽街の路地裏なんかは、注意深い人はあまり寄り付きませんから、よほど好奇心の強い人が無警戒になったときに、瞬間的に狙われるということですが、用心深い人はそんな場所へは滅多に立ち入りません。むしろ①ホテルのコーヒーショップとか、ほっとしたような気持ちのとき、⑤⑥買い物に夢中で自分の持ち物に神経が行き届かなくなっているような場合に、簡単にやられてしまうケースが多いのです。

そして、一応考えられることですが、事故は旅行の終盤になって起きています。やはり、ある程度の馴れと、疲労が重なって注意力が不足したようなときに、普段では考えられないケースとして惹起する場合があります。

## 10. 危機に遭遇した直後の対応

定義に明記された「危機管理」ということになると思います。前述しましたように、団体旅行に参加したお客様が旅券紛失等の被害に遭われたとすると、精神的なケアを含め、全体のムードを元通りに盛り上げることは大変です。でも事故が発生してしまった以上最善の努力を尽くさなければなりません。とりあえず、ツアーを企画した旅行会社、或いはツアーの添乗員が応急に採るべき策としては、以下のようなことが考えられます。

- ① 事態の正確な把握
- ② 現地ツアーオペレーターとガイドの協力体制の確立
- ③ 在外公館等へ連絡して必要なアドバイスと協力をお願いする。

- ④ 会社へ連絡して指示をうける（場合により支援要員の依頼）。
- ⑤ 相談はするが、決断は自分が下す。
- ⑥ 「沈着冷静」を声に出して自分に言い聞かせる。
- ⑦ 周囲（ツアー参加者等）へきちんと説明して、理解と協力を得る。
- ⑧ 考え方と行動を「最善の策」から、冷静に「次善の策」へ切り替える。
- ⑨ 絶対諦めない。被害者を激励し続ける。
- ⑩ 参加者へ絶望、悲観、落胆、失望等の暗い表情は絶対見せない。

以上のようなことを作業的に間断なく進める必要があります。外国では、一都市の滞在日数が短く時間的にタフなことが多く、最大のネックは時間との戦いです。在外公館の協力をお願いするケースでは、祭日とか土日が重なるとまったく動けなくなり、時間がいたずらに過ぎていきます。近くに在外公館のないような都市に滞在することもあります。そんな場合どうするか。あれこれ考えると自分がパニックに襲われる恐れもあります。

突き詰めると一番頼りになるのは、自分自身の冷静で、瞬発的な判断力と行動力です。それは、やはり自分の経験、過去にどれくらい似たような体験をしたか、臨場感をどれだけ身につけているか、ということになると思います。それらの点を考えあわせ、平素から好むと好まざるに関わらず、ある程度疑似体験を積んでおけば、いざという場合大変役立ちます。

この中で、⑤相談はするが、決断は自分が下す、という一項目は、旅行のように流動的なケースでは、事態の解決にとっては基本であるということです。会社の全責任を負っている社長より、事故をもっともよく知り、現場にいて臨場感を辛い立場で味わった添乗員である自分が、速やかに下す決断がもっとも的確を射たものです。莫大な費用がかかる等、特殊な場合を除いては、主体的に自分が決断することを頭に入れておいた方がよいと思います。

⑥冷静になることが行動をスムーズに行うためには絶対必要です。単純なことです、しばし目をつぶり、正座して「1, 2, 3, 4・・・」とゆっくり30くらいまで数字を声に出して言うことも気持ちを落ち着かせるには役立ちます。

⑧「最善の策」から、早めに「次善の策」へ切り替える、ことも大切です。自分としては、「しまった！」という気持ちがあるために、どうしても失敗を取り戻そうとする気持ちが勝ってしまいます。しかし、元通りになるということは絶対ありえません。一歩下がって最善の機会は失なわれた、次善の手段でリカバーしようと気持ちを切り替えると、案外精神的な余裕が生れてきて解決のための良いアイデアが生れてくるものです。あまり一人で気張らないことも大切です。

⑨絶対諦めない。滅入りがちの被害者を激励し続けること、がもっとも大切です。前に述べましたように、一旦事故が起きると被害者の周囲では、つまり同行者の間には、被害者への同情とおせっかいでその場のムードが旅行を楽しむことから、精神的な被害者対策、被害者ケアの場へ変わりかねないのです。同情する気持ちがあっても当然ですが、何もかも

周囲が寄ってたかっておせっかいを焼く必要なんかないのに、連帯責任を負っているという負い目のようなものを感じて、誰も彼もが意識過剰なほど被害者気分になりがちになります。こういう雰囲気の中で、添乗員にとっては過失を取り返すための手段と対策に駆け回る一方で、被害者と残りのお客様を精神的に力強く励まし、決して諦めないよう説得することは並大抵ではありませんが、でもそれは絶対にやらなければならないことです。

## 9. ヨルダンの身柄拘束事件

インドネシアの強盗事件の例をお話いたしました。私は賊に襲われて初めて現場の空気がまったく分かっていなかったことに気づいたのです。そのとき、何かしら曰く言い難い「臨場感」というものに気がつかされたように思いました。そして、時間の経過とともに現地の空気、臨場感というものに少しずつ気がついていったと言えます。ちょうど1年を経て、私はまた同じようなヘマをやって、自らの身を危険な場に追い込んでしまいました。国内には気がつかない現地の空気を、ジャカルタの厳しい体験から少しは現地の臨場感というものが分かりかけていたはずでした。しかし、甘いことにジャカルタとはあまりにも異質なアラブの国、ヨルダンの臨場感は分かっていなかったのです。臨場感は土地によってまったく異なるものです。

1967年6月に勃発した第三次中東戦争直後で、戒厳令下にある国家の治安情勢と社会情勢を考えれば、張り詰めた空気が漂っている市街には神経質になるぐらいの用心深さが必要で、カメラ等はよほど注意して撮影するという配慮が必要だったと後になって反省しました。

私はヨルダン兵に包囲されライフル銃で小突かれ、身柄を拘束され、拳銃の果ては大勢の現地住民が見守る中で両手を上げたまま彼らに連行されました。当初は何が何だか分からず、あまり深刻な気持ちではありませんでした。しかし、時間が経過するに伴い、目の前に立ったひげ面の兵士に胸倉をつかまれ、体中をたたかれ、足蹴にされ、男の急所までむんずと掴まれたときは、すっかり冷静さを失っていました。一瞬やばいと思ったほどです。次第に恐怖感が湧いてきました。体中がわなわな震えてきたのです。身柄を拘束される前に取った私の一連の行動は、無警戒に過ぎたかもしれません。その場の雰囲気は気がつきませんでした。危険に満ちていたのです。そのときの私の臨場感と現地の生の空気との間には大きな違和感と落差があったのだと思います。連行されたホテルで、私は自分自身が怪しげな危険人物ではないということを懸命に主張し、潔白をなんとか証明することが出来て、まもなく解放されました。自由になって初めて、ことの重大さに気がつき、最初に感じた違和感とか、落差が少しずつ消えていったと思います。

インドネシアの強盗事件とヨルダンの身柄拘束事件のふたつの事件は、私の臨場感的感覚を決定的に鋭敏なものに育ててくれました。絶対ということはありませんが、かなりの程度危機意識とか、自己管理に確信のようなものを持てるようになりました。高いツケだ

ったと言うことが出来るかも知れません。ただ、経験することが一番の教訓であるとは考えておりますが、こんなリスクなことは、多くの方にあまりお薦めするわけには参りません。ここが難しいところですが、実体験をした実感として申し上げるなら、やはり経験したからこそ骨の髄まで身につけた、とか「失敗は成功のもの」と言えるのだと思います。絶対ということは絶対にありません。禅問答のようですが、「事故を経験しないように、臨場感を念頭において事故防止に備えることがリスクマネジメントである」とでも申し上げるより言いようがありません。

## 12. 「臨場感」を身につけることが基本

そろそろ結論へ参りましょう。繰り返し述べてきましたが、旅のリスクは、現地の空気を知ることによってかなり未然に防止することが出来ます。その現地の空気は、臨場感によって感じ取ることが出来るわけです。その臨場感は、自らの努力によって磨かれたセンスと感覚、知恵、それに加えて現場へ何度も注意深く足を踏み込むことにより育まれて参ります。

普段から出来るだけ現場（的）臨場感の漂っている場所へ行って、五感を鍛えることに尽きます。旅行地へ行って、少しでも時間的な余裕があったら寸暇を惜しんで、外へ出てみる。神経を研ぎ澄ます感覚を鍛えることです。旅行会社の経営者で個室から指令を出すようでは、旅行業が分かっているとは言えません。旅行業者として当然の経験、臨場感なしには、旅行業を営む資格はないとすら思っています。実際分かっているつもりでも、臨場感の身につけていない旅行業者では、いくら理屈で危険な場所を説明したところで、必ず死角がありますから、ほっと油断した時に思いもかけずにやられてしまうということになります。

私の経験と分かりやすさから申し上げるなら、スポーツの訓練に似たところがあります。ちょうど日本のサッカー代表チームが世界的なレベルにおいて、少しずつ力をつけ、アジアの中で強豪チームに成長した過程に似ています。日本代表チームは、東京オリンピックまでは世界的にも弱小チームだった。ブロックで強豪アルゼンチンを破ったことがきっかけで、東京オリンピック後に本格的な強化策が導入されました。プロの外国人コーチを迎え、それまでのトーナメント戦を止め、リーグ戦を採用することによって試合数を増やし、アマチュアチームからプロチームとなりました。切磋琢磨するチャンスを格段に多くしました。年々国際交流試合が増え、徐々に外国の代表チームの胸を借りるようになって、少しずつ力をつけてきました。サッカーの戦略面、チームワーク、フォーメーション、個人技の養成、相手チームの研究、等々強くなるための知識とか、情報は充分整備されました。後は実際に強豪チームと戦って感じる相手イレブンの個人技、チーム力、「肌で感じる臨場感」を通して会得したセンスとフォーメーションです。相手の選手の体力、スピード、技、瞬発力、動き方、球ぎわのプレイやボール処理、等を身体全体で、また五感で感覚的に感

じることです。自分の身体が相手チームの選手の動きに合わせてどれだけ自在に動いてくれ、それが戦略的にも有効であるか、これらのことを少しずつ自然に身につけ、戦略的にチームにとって役立つことがチーム強化の最大のポイントであるわけです。幸い少しずつその効果は表れてきています。これは、日本の代表チームの個々の選手が、国際試合を戦う過程でゲームから臨場感を掴み取った成果の表れだと申し上げてもよいでしょう。

### 13. おわりに

「旅のリスクマネジメント」については、いろいろな感じ方や見方はあると思います。今日この場で私が申し上げましたのは、私個人の見解として、海外旅行するときにはどこの土地にもある「その場の空気・雰囲気」を軽視してはならない、ということと、『その場の空気・雰囲気』を感じ取る「臨場感」を磨くことが大切であるということ、私自身の稀有な体験上から申し上げました。私自身が海外旅行中の危機に際して掴み取った臨場感的感覚が、その後危機を避ける効果を与えてくれた、と同時にその体験は、それ以来旅をエンジョイするうえでも大いに役立ったという相乗効果も感じる事が出来たということがあります。臨場感は旅に本質的に欠かせないものであることを強く認識するとともに、臨場感なしにはリスクマネジメントもまったく効果がないと断言することが出来ます。そのためには、日頃からいろんな場へ数多く足を運び、そこで醸し出される多種多様な空気に触れて馴染むクセを身につけることだと思います。そして、少しでも臨場感を掴み取るトレーニングを積むことが重要であると思っております。それが結局自らを危険から遠ざける近道につながると確信いたしております。

どうぞ、ここにおられる皆さまも出来るだけ外へお出かけになられ、「臨場感」を意識しながら臨場感を身につける意識を持ち続けられることを願ひまして、本日のお話を閉めさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。